

令和 6 年 6 月 28 日現在

機関番号：37111

研究種目：若手研究

研究期間：2018～2023

課題番号：18K12347

研究課題名（和文）ルソーにおける父親像の総合的研究：18世紀フランス文学に表象される父親像を通して

研究課題名（英文）Comprehensive research of the image of the father in Rousseau : through the representation of the image of fathers in 18th century French literature

研究代表者

井関 麻帆 (Iseki, Maho)

福岡大学・人文学部・准教授

研究者番号：70800986

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究課題は、ルソーの諸作品に描かれる父親と18世紀フランス文学作品に描かれる父親とを比較検討し、「ルソーにおける父親像」の特徴を明らかにした上で、時代のなかで変化する父親の社会的役割との関係、つまり「ルソーにおける父親像」誕生の歴史的意味の解明を試みたものである。ルソーの父親像は、18世紀フランスの社会変動がもたらした家族の変化と共鳴しつつ、専制的な家長から家庭を守る善良な家長へと変化する。それは進歩史観とは逆行的な歴史観を持つ「根本原理」に支えられていた。この「根本原理」によって旧時代の桎梏を脱し、近代的な父親像が誕生したという逆説的な図式が明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「ルソーにおける父親像」を検討した本研究課題は、「父親の存在」よりも「母親の不在」が注目されていた従来のルソー研究に新しい視座を与え得るものである。研究期間中に日本フランス語フランス文学会「第25回学会奨励賞」を受賞したことから、研究代表者の着眼点が高く評価されていることが確認できる。研究成果は、日本フランス語フランス文学会九州支部が刊行する学会誌および福岡大学が刊行する紀要への投稿論文に加え、ルソーの霊廟があるパリのパンテオンで開催された国際シンポジウムやローマ・サピエンツァ大学で開催された国際18世紀学会において報告し、国内外に広く発信することができた。

研究成果の概要（英文）：This project compares the fathers depicted in Rousseau's works with those in 18th century French literature. It clarifies the characteristics of the image of the father in Rousseau's works, and then attempts to explain the relationship between the changing social role of the father during that period. In other words, it illustrates the historical significance of the birth of the image of the father in Rousseau's works. Rousseau's image of the father corresponds with changes in families triggered by 18th century French society, as the father becomes a good patriarch who protects his family, rather than a tyrannical one. This transformation was supported at the time by the "fundamental principle", a retrospective view of history different from the progressive historical view. The paradoxical picture of the birth of the modern father figure, free from the obstacles of the past, was rendered possible by the "fundamental principle".

研究分野：フランス文学

キーワード：仏文学 思想

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は、博士論文執筆時より「ルソーにおける父親像」に着目している。誕生とともに母親を失ったルソーは、父親から受けた教育が自らの思想および精神の原点であると諸作品において幾度となく述べている。しかし、従来のルソー研究では、父親がルソーに与えた影響はほとんど注目されてこなかった。

ルソーの父親に関する研究は、自伝『告白』（1782-89年）の検討に始まる。だが、そこから一歩進めようとするなら、作品を対象とした文学的、思想的研究に加えて、古文書などの歴史資料を用いた実証的な研究が要請される。しかし、1920年代に『ルソー学会年報』に収められた実証的研究論文や、1970年代に精神分析的手法によってルソーと父親との関係を論じたピエール＝ポール・クレモン以降、研究が進んでいるとは言いがたい。

そこで研究代表者は、『告白』を主なコーパスとし、古文書および書簡の分析から浮かび上がる父親の実像との比較検討により、『告白』執筆過程で生じた父親像の変容（実像の理想化）が、ルソーの諸作品を貫く思想の生成と密接な関係があることを博士論文で論証した。研究成果は博士論文の審査をはじめ、フランス国立科学研究所・ソルボンヌ大学共催の講演会や日本フランス語フランス文学会で高く評価され、同学会誌に論文が掲載された。なお、当該論文は日本フランス語フランス文学会「第25回学会奨励賞」（2018年）を受賞した。

18世紀フランスにおける「父親」の問題は、社会変動と深く関係している。17世紀に形成されたフランス絶対王政を支えるイデオロギーのひとつに「家父長制国家論」がある。これは、国家を家族の集合体とみなし、父親が家族を統治する絶対的な権力、すなわち家父長権のアナロジーとして国王の権力を正当化し、それらの権力は神に由来する、というものである。ところが18世紀になると、フランス社会は商工業の発展や市民階級の台頭など極めて高度な成長を遂げ、父親の社会的役割も大きく変化した。歴史家フィリップ・アリエスは『子供の誕生』（1960年）において、旧社会の家族における家長の絶対的権威が、経済的な発展と個人主義的な思想の誕生により次第に弱まり、近代的家族に相応しい父親が求められるようになったと論じている。

社会におけるこのような変化は、同時代の文学作品や芸術作品に表象されている。ジャン＝クロード・ボネは論考「父の呪い」（1980年）において、1750年以前の作品と以後の作品に描かれる父親像を比較検討し、前者が後者とは異なる役割を演じていることを指摘した。ボネが主張するように、ディドロの戯曲『一家の父』（1758年）やルソーの書簡体小説『新エロイズ』（1761年）に描かれる父親は、アリエスが定義する近代的家族の父親と合致する。つまり、絶対王政を象徴する父親という存在は、革命へ向かって時代が動く18世紀フランスにおいて社会的役割が変化したのであり、この変化は文学作品においても確認できるのである。

このような考察から、18世紀フランス文学に表象される父親像の変容過程を精査し、そのなかにルソーが描く父親像を位置づけることで、その特徴が明らかになるだけでなく、フランス革命に大きな影響を与えた啓蒙思想家「ルソーにおける父親像」誕生の歴史的意味を解明できるのではないだろうか、という本研究課題の着想に至った。

2. 研究の目的

本研究課題は、これまで研究代表者が『告白』を中心に検討してきた「ルソーにおける父親像」の研究を深化発展させることを目的としている。

『告白』は自伝という形式を採っている以上、現実の父親の姿から完全に免れることはできない。しかし、『新エロイズ』などのフィクションであれば、完全な理想像を提示することができる。啓蒙思想家ルソーが描く理想的な父親像は、18世紀フランスという時代のなかで変化する父親の社会的役割とどのような関係があるのか。このような問題意識に立脚し、本研究課題はルソーの諸作品に描かれる父親と18世紀フランス文学作品に描かれる父親とを比較検討し、「ルソーにおける父親像」の特徴を明らかにした上で、18世紀フランスという時代のなかで変化する父親の社会的役割との関係、つまり「ルソーにおける父親像」誕生の歴史的意味の解明を目指すしている。

さらに、これまでのルソー研究は「父親の存在」よりも「母親の不在」が注目されており、研究代表者が博士論文執筆時から手がけている、ルソーの父親像と思想形成との関係を問う研究は、あまり進んでいない。本研究課題はこの問題意識を引き継ぎ、ルソーが描く父親像の網羅的分析および相対的把握を通して、「ルソーにおける父親像」研究の基盤となる資料を提供することも目標に据えている。

3. 研究の方法

本研究課題を遂行するにあたって、国内で入手可能な文献を渉猟するとともに、2018年度と2019年度には夏季休暇を利用してフランス国立図書館およびフランス国民議会図書館において資料調査を行った。また、上記出張中には、博士論文執筆時より「ルソーにおける父親像」について議論を重ねているパリ第7大学のヤニック・セイテ准教授をはじめ、18世紀フランス文学を専門とする研究者たちと面談を行い、「ルソーにおける父親像」の変遷と啓蒙期における父親の社会的役割の変化との関係について討議した。なお、2020年度以降は、新型コロナウイルス

感染症拡大の影響によりフランスでの資料調査が難しくなったが、オンライン開催される学会や研究会を通して最新の研究動向を把握するとともに、国内外の研究者との意見交換によって本研究課題を深化発展させるための重要な情報を得ることができた。2022年度以降は、新型コロナウイルス感染症拡大の影響が徐々に緩和されたため、2022年度はパリのパンテオンで開催された国際シンポジウムに登壇し、2023年度にはローマ・サピエンツァ大学で開催された国際18世紀学会において研究成果を報告することができた。国際的な学術交流の場を通して、文学のみならず哲学や政治思想の観点からルソーを研究している専門家や、18世紀フランスを歴史学や社会学の立場から考察する研究者と意見交換を行い、分野横断的な視点を得ることができた。

4. 研究成果

本研究課題の成果については、研究期間中に発表した学術論文(6件)に加え、招待講演を含む学会発表(3件)を通して報告した。

(1) ルソーの諸作品に描かれる父親像の考察

まず、『新エロイズ』に描かれる父親像を明らかにした。分析にあたって、『新エロイズ』全編から父親に関する全ての描写をリストアップした上で、それぞれの特徴によって分類し、「ルソーにおける父親像」研究の基盤となるデータベースを作成した。その結果、『新エロイズ』に登場する二人の父親は、専制的かつ家父長的な父親と、家庭を守る善良な家長という異なった姿で描かれており、それは前者から後者へと姿を変える18世紀フランスの父親像の変遷と極めて親和性が高いことが判明した。また、『政治経済論』(1758年)および『社会契約論』(1762年)で提示される父親を考察した。ルソーは両作品において、国家の表象としての家族に着目し、家長である父親の役割について述べているが、政治的著作においても『新エロイズ』で展開された理想の父親像や家族像が貫徹されていた。つまり、諸作品を貫く「あるべき父親像」を明らかにすることができた。

次に、『新エロイズ』の善良な家長が掲げる教育理念と、『エミール』(1762年)で理想とされる消極教育との比較検討を行った。その結果、両者は同様の思想に基づいており、理想の教育に必要とされる父親の役割は、『政治経済論』および『社会契約論』で提示される家長の役割に通じていることが判明した。また、『新エロイズ』において、家庭のなかに悪徳が入り込むことを防ぐという家長の役割は、ルソーの諸作品を貫く思想(根本原理)を反映したものであることが明らかになった。

さらに、『百科全書』(1751-72年)の項目「親権」をはじめ父親に関連する項目を調査した上で、18世紀フランスにおける家族の概念について考察し、それに基づいてルソーが『政治経済論』や『社会契約論』などの政治的著作で提示する家族観や、『新エロイズ』で描く理想の家族像を分析した。その結果、ルソーは絶対王政を象徴する「父権」を限定的に捉え、その限定的な「父権」を備えた父親が率いる家族を啓蒙期における理想の家族像として見据えていたことが明らかになった。また、それはディドロを筆頭とする『百科全書』の執筆者たちが共有する価値観とも一致していることが判明した。

そして「ルソーにおける父親像」誕生の起源を探るべく、ジュネーヴで時計職人を営むルソー家の来歴を紐解き、家業とともに父親から息子へ継承された父親像について考察した。その結果、フランスの啓蒙思想家として歴史に名を残したルソーが、『学問芸術論』(1750年)や『人間不平等起源論』(1755年)において「ジュネーヴ市民」と名乗り、その肩書きに固執し続けた理由を、父親さらには祖父から受け継いだ祖国愛に見出すことができた。さらには、誇り高い「ジュネーヴ市民」として政治闘争に参加する祖父や、政治権力を独占していた特権階級に敵意を示す父親の存在が、ルソーの父親像のみならず政治思想にも大きな影響をもたらしていることが明らかになった。

これらの研究成果は、日本フランス語フランス文学会九州支部大会(2018年)において口頭で報告した上で、同学会誌(『フランス文学論集』第54号)に論文が掲載された。また、福岡大学が刊行する紀要(『福岡大学人文論叢』第51巻第4号、第52巻第3号)への投稿論文を通して報告した。

(2) 18世紀フランス文学に表象される父親像の分析

まず、18世紀フランスの大衆作家レチフ・ド・ラ・ブルトヌの作品に描かれる父親の考察を行った。レチフは膨大な作品を残した作家として知られているが、なかでも父親を主題とした『父親学校』(1776年)、『わが父の生涯』(1779年)、『父の呪い』(1780年)においては、時代のなかで変化する父親像を確認できた。また、自伝『ムッシュー・ニコラ』(1794-97年)には、幼少年期におけるレチフと父親との関係が色濃く投影されており、レチフの父親像の解明に繋がる重要な作品であることから、作品に登場する父親の描写を抽出し、その傾向と特徴を分析した。その結果、専制的な家父長として振舞う父親と、息子を愛し慈しむ善良な父親という二面性が明らかになった。この対照的な父親像は、ルソーの『新エロイズ』に登場する二人の父親の特徴と共通しており、近代的家族の誕生に向かって変化する父親を両作品に見出すことができた。

次に、18世紀フランスにおける父親像をより明確に把握するため、公開を前提として執筆された作家や思想家の自伝的作品から離れ、庶民が書き残した自伝的テクストを分析した。なかでも、パリのガラス職人ジャック＝ルイ・メネトラが書き残した『わが人生の記』(1982年)は、

当時の社会を知り得る貴重な資料であり、また父親が脚色されることなく描かれていると期待できたため詳細に考察した。その結果、懲戒権という名の暴力を振るう父親、つまり「父権を行使する父親」に対して悪感情を抱きながらも、親愛の情を捨て去ることのできなかつた息子メネトラの姿、そして子どもたちの幸福を祈り続ける父親としてのメネトラの姿を確認することができた。ここに、「父権を振りかざす父親」から、家長としての威厳を保ちながらも「父権を脱ぎ捨てようとする父親」への変化を読み取ることができる。また、メネトラが書き残した記録は、一貫して「父親と自分」および「自分と子ども」という家族だけを念頭に執筆されていたことも明らかになった。これは先祖や子孫を切り離れた、いわば「家」の存続を前提としない家族観である。つまり『わが人生の記』には、近代的父親像および近代的家族観が胚胎していたといえる。

さらに、ルソーと同時代に活躍した啓蒙思想家ディドロの作品に描かれる父親の考察を行った。ディドロは『百科全書』の編集者として知られているが、父親を題材とした作品を残した作家でもある。そこで、自伝的要素の強い『ある父親と子どもたちとの対話』(1771年)および『父と私』(1818年)と、戯曲として創作された『一家の父』(1758年)および『不幸な父親たち』(未刊)の四作品から浮かび上がる父親像を分析した。その結果、前者には、子どもたちと対等に議論し、子どもたちから敬愛される父親を、後者には「父の呪い」と称される「父権」を行使する父親を見出すことができた。特に後者では、慈愛に満ちた父親のなかに専制的な「暴君」たる父親が現れ、再び慈愛に満ちた父親に戻っていく様子をディドロは克明に描いていた。このようにディドロの父親像は、旧来の「専制的な父親」から来るべき「近代的な父親」へと移りゆく、過渡期の父親像を象徴していることが明らかになった。

以上のことから、ルソーに限らず、18世紀後半の文学作品に表象される父親像と、社会における父親の役割や家族のあり方の変化には、相関性が存在すると結論づけることができた。これらの研究成果は、福岡大学が刊行する紀要(『福岡大学人文論叢』第52巻第2号、第53巻第4号、第54巻第4号)への投稿論文を通して報告した。

(3) 「ルソーにおける父親像」誕生の歴史的意味の解明

最後に、これまでの研究成果を踏まえつつ「ルソーにおける父親像」に歴史観という視点を取り入れて考察した。具体的には、17世紀末から18世紀初頭にかけて行われた新旧論争、すなわち古典古代の価値の再認識がルソーにいかなる影響を与えたのかという問題意識から、ルソーにおける古典古代と父親像との関係を検討した。これまでの研究で明らかにしたように、『新エロイーズ』には「暴君たる父親」と「善良な父親」の混在、そして「善良な家長」へという父親像の展開がみられる。これは、歴史学者や社会学者が示した近代的家族の誕生と一致する。一方、ルソーの父親像を支えている「根本原理」は「進歩による衰退」、つまり進歩史観とは逆行的な歴史観を持っている。ルソーは『学問芸術論』をはじめとする諸作品において、人間の進歩や文明の発展を懐疑的に見つつ「進歩による衰退」を主張すると同時に、古典古代を高く評価している。古典古代を理想に掲げることで、絶対王政の支柱となったキリスト教的な歴史観という旧来の桎梏からの脱却を試み、その上で「あるべき父親像」を打ち立てようとしたと考えることができる。つまり、進歩や発展を否定する「根本原理」を適用した結果、近代的な父親像が誕生した、という逆説的な図式が明らかになった。

これらの研究成果は、ルソーの霊廟があるパリのパンテオンで開催された国際シンポジウム(2022年)およびローマ・サピエンツァ大学で開催された国際18世紀学会(2023年)において報告した。また、本研究課題の最終成果については、国際会議における口頭発表や国際学術誌への投稿論文を通して国内外に広く発信し、18世紀フランス文学研究に新たな知見をもたらしたい。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 6件）

1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 54-4
2. 論文標題 ディドロにおける父親像 「父の呪い」からの解放	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 991-1019
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 53-4
2. 論文標題 18世紀フランスにおける父権の表象 ジャック＝ルイ・メネトラの『わが人生の記』を通して	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1247-1268
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 52-3
2. 論文標題 ジュネーヴにおけるルソー家の来歴 父親からの継承をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 889-912
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 52-2
2. 論文標題 レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの父親像 『ムッシュー・ニコラ』における幼少年期をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 601-625
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 51-4
2. 論文標題 ルソーにおける家族像 『新エロイズ』にみる理想の家族の崩壊をめぐる	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 福岡大学人文論叢	6. 最初と最後の頁 1021-1046
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 井関麻帆	4. 巻 54
2. 論文標題 善良なる暴君 『新エロイズ』におけるルソーの父親像	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 フランス文学論集	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計3件 (うち招待講演 1件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Maho Iseki
2. 発表標題 Aspects modernes et antiques de la notion de famille chez Rousseau
3. 学会等名 16th Congress of the International Society for Eighteenth-Century Studies (国際学会)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 Maho Iseki
2. 発表標題 L'image du pere et l'inegalite chez Jean-Jacques Rousseau
3. 学会等名 Rousseau au Pantheon (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 井関麻帆
2. 発表標題 善良なる暴君 『新エロイーズ』におけるルソーの父親像
3. 学会等名 日本フランス語フランス文学会九州支部大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関